

四天王寺

日本最古の官寺である四天王寺は、当時日本に伝来したばかりの仏教の興隆に努めた聖徳太子によって 593 年に創建されました。四天王寺は長年の間に何度か再建され、大阪の人々の心の拠り所として存在し続けてきました。

現在の建物のほとんどは、第二次世界大戦後に、考古学的研究に基づいてできるだけ創建当時の姿を忠実に再現するよう建設されたものです。しかし、四天王寺には何世紀も前に建てられ現在は重要文化財に指定されている建物もいくつか存在します。

中心伽藍

四天王寺の心臓部は、南北を結ぶ直線を軸に左右対称に建物が配置されている回廊式の中心伽藍です。この配置は、正門である南門から見たときに最大の視覚的インパクトが得られるようになっています。南から北に向かって、中門（入口の左右に置かれた巨大な像にちなんで仁王門とも呼ばれる）を抜けると、[眼前に]中心伽藍が開けます。手前には、上部に相輪と呼ばれる 12m の装飾部を冠した高さ 39m の五重塔が立っています。その背後には金堂（本堂）、そして境内の最奥に講堂があります。

金堂には、この寺の本尊である聖徳太子を観音（Avalokiteshvara、救済の菩薩）に見立てた像が安置されています。観音像の傍らにはこの寺の名称の由来である四天王像が祀られています。壁面を覆う壁画には、釈迦如来の生誕から悟りを経て涅槃に至るまでの生涯が描かれています。

聖徳太子本人が法華経の講義を行ったとされる講堂には、十一面観音像や高さ 6m の阿弥陀如来坐像が安置されています。講堂の壁は、中国に仏典を持ち帰るためにインドに渡った三蔵法師（玄奘）の旅を描いた壁画で飾られています。金堂と講堂の壁画や仏像は、伝統的な様式の作品を手がける一流の美術家たちによって 20 世紀に制作されました。

注意：寺院の建物内はすべて撮影禁止です。

建造物に刻まれた歴史

荘厳な中央伽藍に加え、境内にある小さめの建造物の数々も四天王寺の長い歴史を物語ります。最も古いのは、国の重要文化財であり、1294 年に勅令によって西門の外側に建てられた石の鳥居です。13 世紀には西門のそばに立てば大阪湾に沈む夕日を眺めることができましたが、当時広く普及していた浄土真宗の信徒にとって、その光景ははるか西方の阿

弥陀如来の極楽浄土を想起させたに違いありません。鳥居にかけられた銅板には、この鳥居が「極楽の東門」であると書かれています。

中心伽藍のすぐ北側には 1623 年建立の六時堂があり、こちらも国の重要文化財に指定されています。六時堂から見晴らせる 17 世紀初頭に建てられた石舞台では、今でも毎年 4 月 22 日に、古来の伝統的な合奏音楽と舞「雅楽」の演奏が行われています。

境内の東側には、参拝者が聖徳太子に学業成就などを祈願する聖霊院（太子殿 [Prince's Hall]とも呼ばれる）と、聖徳太子ならびに聖徳太子の仏教に対する庇護に関わる美術品を収蔵する宝物殿があります。この 2 つの建物の間には、経典をかじるネズミを見張る猫の彫刻が施された「猫の門」があり、その近くには、四天王寺の建設を手がけた大工（番匠）たちを祀って建てられた番匠堂があります。番匠堂の特徴的な幡には、伝統的な念仏「南無阿弥陀仏」の文字が大工道具をモチーフにした輪郭線で描かれています。

極楽浄土の庭

中心伽藍の北東には、別の重要文化財である五智光院（Temple to the Light of the Five Wisdom Tathagatas ; [五智如来の光を祀るお堂]）があります。現在の五智光院は 1623 年に再建されたものですが、その前身の建物は、平家物語中に記されているように、1187 年に後白河法皇のために建立されました。

五智光院の隣には、極楽浄土の庭（Garden of the Pure Land Paradise）への入り口があります。この庭園は、茶人・三代目木津宗詮（1862-1939）が瞋りと貪りの「二河」の間に救いへの細い道があるという説話をもとに構想し、それに基づいて 1933 年に造られました。極楽浄土の庭は 2003 年に改修造園を経て一般公開されました。この庭園は蓮の咲く池や茶室を備えた爽やかな緑のオアシスです。南西の角にある重要文化財の湯屋方丈は、もともと僧侶の住居兼浴場として使われていたもので、1623 年に最後に建て直されました。